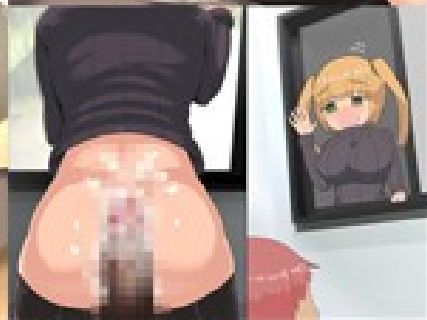


自分が盗撮している事を露出狂の娘にバレてしまい
その日から付き合わされる事に



露出狂の
危険
な教え子といっしょ



※人が来たのでロッカーに隠れる2人

●REC



●REC



●REC



●REC







「ふう……やっぱ学校で隠れてオナニーするのさいつこお……」



「え？」

///

///
ぽんぽんぽん
///



「なに今の音、こっからしたような
・・・スマホ？隠し撮り？マジ？
うわぁバツチり映ってんじゃない」

「女子更衣室録画とかマジいい趣味してるなあ
ってかこのスマホ見た事ある
・・・あっ思い出した」



「はいこれ
先生のですよね？」

「うん……」

「たまたま電話が鳴って見つけました
私じゃなかったら大変な事になってましたね」

「……」

「でもまさか盗撮が趣味だったなんて驚きですよ」



「ごめん・・・この事は・・・」
「そんな怯えなくても大丈夫ですよお
私たちのひみつです♪」

「それに私、全然怒ってませんから」
「ほ、ほんと？」
「ホントホント」



「怒ってないので先生のエッチな動画撮らせて下さい」
「え……」

「早くちんぽだしてください♡」
「……」
「はやく♡」



「わぁ結構大きいかも
勃起してないのにこんな何ですか？すごい」

「あれ？もしかして
見られて緊張してます？
じゃあ足で手伝ってあげますね♡」





「満足しましたぁ♡
もちろんなこの事も盗撮の事も誰にも言いません」
「よかった・・・」

「これで先生と私は
エッチな部分を見せあった
いわゆるお友達ですよね」
「うん？う、うん」
「ねー」



ドロー...

「じゃあ今日から先生は私のセフレですよね」
「……えっ！」

「嫌ですか？嫌なんですネ悲しい……
悲しくて動画投稿サイトにアップしちゃいそう」
「うっ」

「あはは、冗談ですよ」
どこまでが冗談なんだろう
「これから毎日キモチイイ事しましょうね♪」
……やばい事になっちゃったぞ
その日から教え子との奇妙な関係がはじまった







「うわぁ〜♥すごいすごーいめっちゃ濃いの出てますよお」
「こんな所で続けたら誰か来るんじゃないや・・・」



「それが良いんじゃないですかあゝ
来そうで来ないような所でエッチするのは最高です♡」
「うーん・・・」



「まあまあ、そのうちこの良さに気づきますって」
「そうかなあ・・・」
「それじゃ次はあゝ」





「うへえすっごい出てる・・・
身体の相性良いのかも？」



途中から夢中になってしまった
人目に付きそうな所でやるのが
こんな興奮するなんて・・・

「さすがにまずくないかな・・・」
体育館の横の倉庫
運動をする生徒達の声や音が聞こえてくる

「平気平気♪たぶん来ませんって」

「たぶんって・・・」

「それにほら、さっきまで体育の授業だったんですよ
汗だくの体操着でヤルってなったら
やっぱり場所はこういう所が良いかなって」

それは・・・良いと思うけど

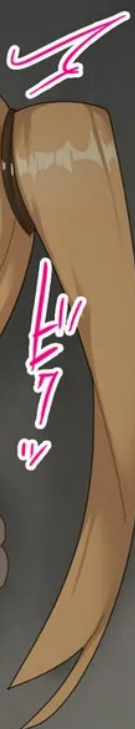








「あれ？鍵がかかってる？」
「いやそんな事はないだろ」



「んーやつぱ開かないぞ」
「・・・ほんとだ」
「じゃあ力ギ取ってくるから待ってて」
「おう」

「やばい」

「あはは・・・ほんとに来ちゃいましたね、どうしよ」



「よし開いた」

「うん？何か臭くね？」

「そうか？こんなもんだろ」

「うーん俺の鼻がおかしのかな
まあいいかそういうや昨日テレビで……」

あわわ

「気づいてないみたい」
「……」

ロッカーに逃げ込んだ
ばれてないけど
匂いがこもる上に身体が密着してこれは

「助かったね先生……ちょ、ちょっと!?!」

んぎゅ

んぎゅ



「ちよ、なにを・・・んっ
これやば・・・やばいつて・・・っ♡♡♡」

ガッ

んっ♡

んっ!?

ガッ

ガッ

んっ♡

んっ♡

ガッ

んっ♡

んっ♡



「……あった、これだろ？」
「ああそれぞれ、じゃあ行こうぜ」

入り口の扉が閉まる音と
足音が遠ざかっていくのが聞こえた

「……先生」

「ごめん、我慢できなかった」

「んもお……めっちゃびびったんだからね……
でもめっちゃ興奮もしたからまたやろうね♡」

「うん」

ドズドズドズ……

ビュ〜……





「元気？気合入ってんね」
「今週末に大会あるからね」



「そっかぁ〜自信あり？」
「そりゃもう狙うのは優勝だよ」
「おお〜」



「前回はいまいちだったからね
練習もみっちりしたしメンバーの編成も・・・」



「ふーん、そうなんだ」



「ところで何してんの？」
「んっ!？」



「だって帰宅部でしょ？なんでこの時間に」
「あっ、あーいやっ！これから帰る所だよ！」

「あと顔赤いけど大丈夫？風邪？」

「そ、そうそう風邪だよ！」

ガッガッ

ズリッ

ズリッ

「急に体調悪くなって
さっきまで休んでたんだあゝあはは」
「気を付けなよ」

？



「じゃあ私練習あるから」
「うん、それじゃあねえ」

「……ふう」
「……よくやるね」



「めっちゃ良かった、先生もどう？代わる？」
「遠慮しておくよ」

「突然すいません」

「いえいえ、こちらこそ迷惑じゃないかと
娘の為に特別に家庭訪問をして下さるなんて」

「あはは・・・」

「助かるよね」

「ほんとねー」

「ちょっと先生と二人で進路の相談していい？」

「まだ考えがごちゃごちゃしてて、後でまとめて言うからさ」

「そういう事なら席を外すわ」

「ありがとう」

ボタン

トントントン・・・

「・・・よし」

「一応聞くけど、大丈夫なの？」

「大丈夫〜声出さないように気をつけるからあ」



のっ



「教え子の部屋でなんて。。。いいのかな」

「ガチガチに勃起させておいてそれはないんじゃない？」

「まあ。。。うん。。。」

「じゃあやるやる♪」



「ちなみに鍵かけてないからね♡」
「!？」

「興奮するね〜」

あっ♡

あん♡

タパッ
タパッ

ズ
ズ
ッ

ズ
ズ
ッ

「あはっ・・・めっちゃ硬くなってる♪
そんなゴリゴリされたら中の形変わっちゃうよぉ♡
そろそろ出そう？
いいの？来ちゃうかもしれないんだよ？うふふ」



「んふっ♡遠慮なくいっぱい出してゐるね♡」

ん
う
♡

Love 777

「教え子の家でこんな事してえ・・・いけないんだ♡」

「気持ち良かったね、またしたいなあ」
「すごく良かった。でも次はいつになるか」

「ところでさあ先生」
「うん？」

「明日はみんな出かけちゃうから
私ひとりでお留守番なんだよね」

「……ゴクリ」

「楽しみだね♡」



その日は朝から教え子の家に行った
待ってました♪と言われた後は
お互いの服をはぎ取ってすぐにはじめた





「あはっまだ出てる♡」

「今までいっぱいしたから
先生の身体の事ちよつとわかってきたかも」



何時間経ったかわからない

食事や風呂など少し休憩を挟んだけど
その目それ以外の時はずっとやり続けた





「ふへえ・先生体力ありすぎい・・・
もつとしたい？まあいいですけどねえ」



「あとそんな強く抱きしめなくなつて
逃げないってば♡」





「また学校でこんな事を・・・」
「でも良かったでしょー？」
「・・・うん」

ふーんー♡

んふー♡

ドゴ

ドゴ

ゴゴゴ
ゴゴゴ

「あつ、そういえば先生」



「今日は危険日だからこれ絶対デキてるよ♡」
「えっ！だ、だって、さっきは大丈夫だって。。。」
「先生の赤ちゃんなら大丈夫って意味だよぉ」
「ええ。。。」

ニヒイ

＃



「いいよね？」

「まあ・・・うん・・・君がいいなら・・・」
「えへへ、先生ならそう言うと思ったよお」



「じゃあ確実にできるやうにもう一回しよ！」

「人來ないかなあ・・・」

「誰か來ないかなあ♡♡」



おしまい

●REC



●REC



●REC



●REC



































































































